

町の風景をじっと見つめる
いつしか、つくりたい未来が見えてくる



1 神戸大で建築学を学ぶ学生の協力を得て、復興への足跡を写真で残す定点観測に取り組む。震災前の様子が映像で記録されている場所や、地域の人たちに愛された憩いの場所など、180カ所を定期的に歩き、復興の途にある風景を写真に収める。変わりゆく町を見ながら、生徒たちは「つくりたい郷土の未来」を思い描く。



2 3 2013年4月にスタートした定点観測。今後、5年、10年……と長い時間を掛けて町の変化を記録する。未来の大槌高校の生徒たちに引き継がれていく活動だ。



ハートを
こがせ!

Vol.03

岩手県立大槌高校
復興研究会

被災地の「今」を支え、伝え、
そして未来を考える！
高校生が挑む震災からの復興

高校生だから出来る「復興」が
こんなにたくさんあった!

東日本大震災で甚大な被害を受けた東北沿岸部では、震災からの復興に貢献できる人材を育成すると共に、震災の記憶を風化させないために、各校で様々な活動を行っている。中でも、岩手県立大槌高校の復興研究会は、全国の様々な団体、教育機関と連携・交

流しながら、復興の途上にある地元・大槌町の現状を広く発信し、次代を担う若者として新しい町づくりに積極的にかかわっている。被災地で暮らし、学ぶ中で、教師の想像を超えるスピードで大きく成長していく生徒たちの熱いハートに迫る。

机上の空論は1つもない！
私たちの意見が
実際に町をつくる



7 小泉進次郎復興大臣政務官を迎え、大槌高校の生徒たちが策定した「コミュニティ戦略」について意見交換を行った。東京大の研究者らと共に考えた施策の実現のため、大槌町は50万円の予算を計上した。



4 5 6 公園づくりに高校生の意見を取り入れたいという大槌町都市整備課の申し入れを受けて、公園づくりワークショップにも参加。震災後、公園や運動場がなくなり、遊び場を失った子どもたちのために、安心して集まり、遊べる場所を考えるなど、コミュニティの再生にも深くかかわっている。



ハートを
こがせ!

Vol.03

岩手県立大槌高校
復興研究会

高校生の視点で 復興を支えながら 大きく成長する



様々な側面から 地域の復興に直接かかわる

岩手県立大槌高校の復興研究会は、全校生徒の3分の1に相当する80人が所属する大所帯だが、参加生徒の主体性を重視し、部長は置かず、その時々々の生徒の興味・関心や地域のニーズに応じて柔軟に活動を展開している。

現在の主な活動は、「町づくり」「キッズステーション」「定点観測」そして「他校交流」「広報」だ。「町づくり」では、東京大や千葉大の研究者の助言を受けながら、大槌町役場の方たちと新しい公園のあり方などを考えています。町の復興は大人がすること、高校生には荷が重いのと思う人もいるかもしれませんが、実際に新しい町のデザインや景観づくりに自分がかかわれていることに、大きなやりがいを感じます」(山崎さん)

「定点観測は、180カ所の風景を定期的に写真

に収める活動です。町の様々な箇所を撮影して感じるのは、がれきなどの処分が終わわり、復興事業は確かに進んでいるけれど、住宅再建はまだまだこれからだということ。実際、人が戻ってきていない地域も多く、コミュニティの再生は大きな課題です。町の風景をカメラに収める度に、将来も、地域の復興に携わりたいという気持ちがますます強くなります」(倉本さん)

「私が力を入れている活動の1つが、キッズステーションです。被災地には、仮設住宅に入り、地元の友だちと離れたことなどが理由で、外で遊ぶ機会の減った子どもがたくさんいます。キッズステーションは、夏休みなどを利用して、地域の児童センターに子どもたちの遊び場をつくる活動です。子どもたちと年齢が近い高校生だから出来る取り組みですし、家の外でたくさんの方たちと元気に遊ぶという、子どもにとって当たり前のことが難しくなっている現状に目を向けなければ、

教師の思い

様々な人と接する中で
生徒は豊かに成長する

くまがい
熊谷一郎

復興研究会が力を入れている活動の1つが、全国に出掛け、復興の現状を伝えることです。私も、倉本くんたちと関西の高校などを訪問しましたが、本校の生徒が語る被災地の今に対して「もうすっかり元の生活に戻っていると思っていました」と率直に驚きの声を上げる高校生もいました。被災地の実情を全国の方に伝えるだけでも大きな意味がありますが、生徒にとつての最大の価値は、そうした交流を通じた自身の成長だと思えます。様々な年齢、立場の人と接し、多様な考えを吸収することで、生徒の世界は広がります。自分を語る言葉がどんどん豊かになる生徒の姿は感動的です。



くまがい いちろう
教職歴27年。同校に赴任して2年目。
生徒指導課長。復興教育担当主任。体育科。

仲間の存在があるから
未来に目を向けられる

いুকこ
松橋郁子

復興研究会の生徒を見て、いつも思うの

真の復興とは言えないと思うのです」（前川さん）

これからの復興を支える 人材として成長する

復興研究会に所属する生徒のほとんどが他部と兼部しており、更に復興研究会の中で複数の取り組みに参加している者も多い。例えば、3年生の倉本さんは「定点観測」「町づくり」、そして全国の高校を訪問し、復興の現状を伝える「他校交流」にも参加。自由な時間はおのずと少なくなるが、それでも「地元の復興にかかわるだけでなく、他の高校生が体験できないようなことに挑戦させてもらっている」（倉本さん）と多忙さも厭わない。



復興の現状を広く伝えるため、全国で講演活動を展開。津波による被害の状況などだけでなく、ピーク時には1000人の避難者を受け入れた大槌高校で、当時の生徒が地域のためにどのように活動したのかを後輩たちが語り継ぐ。

被災地に住む生徒たちは、復興にはまだ多くの時間が掛かることをよく知っている。期待と不安が入り混じりながら、それでも笑顔で活動に取り組む生徒の様子を前に、同校の教師たちは「復興はまさに人づくりなのだ、私たち大人が生徒に教えてもらっている」と率直に語る。

「いろいろな人の考えを聞いて、自分の考えを更に練り上げるのは、考えることが苦手な僕にとっては最初は大変だったけれど、今では『将来、町をこうしたい!』といういろいろなアイデアが出てくるようになった」（山崎さん）、「防災教育と保育を融合させた、新しい取り組みを考えてみたい」（前川さん）など、これからの復興を支える生徒たちは目覚ましいスピードで成長している。

前川美里

まえかわ・みさと

3年生。「町づくり」「キッズステーション」「他校交流」に参加。ボランティア部と兼部。

倉本拓磨

くらもと・たくま

3年生。「町づくり」「定点観測」「他校交流」に参加。卓球部と兼部。

山崎大悟

やまざき・だいご

2年生。「町づくり」「定点観測」「広報」に参加。コンピューター部と兼部。

は、「楽しみながら、自分に出来ることを続けてほしい」ということです。高校生は、のめり込むとつい頑張り過ぎてしまいます。本当は、被災地で暮らしているだけでも大変なのです。無理はしないでほしいと思っています。でも、私の心配をよそに、生徒たちは皆笑顔で活動しています。津波が襲った場所を記録する定点観測も、1人で見ているとつらいことを思い出していますが、仲間と一緒にだから、「ここでよく遊んだよね!」と過去を受け入れ、その上で「ここがどんな場所になればいいのだろうか?」と未来を語るきっかけに出来ています。仲間と取り組むからこそ、彼らは前を向けるのです。



まつし・いづみ

教職歴32年。同校に赴任して7年目。図書館長。復興教育担当副主任。

岩手県立大槌高校

◎福祉施設での介護体験・各種ボランティア活動などを通じて地域の人々と交流を深めながら、地域社会に貢献する人材を育成する。学校のある大槌町は東日本大震災の津波により壊滅的な被害を受け、生徒の大多数が被災した。

◎設立 1919（大正8）年

◎形態 全日制／普通科／共学 ◎生徒数 1学年約80人

◎2015年度入試合格実績（現役のみ）国公立大は、岩手

県立大、都留文科大に2人が合格。私立大は、東北福祉大、

拓殖大、明治学院大などに延べ13人が合格。短大、専門学校

進学51人、就職44人。

◎URL <http://www2.iwate-ed.jp/oh/h/>